

シロアム碑文再考

守屋 彰 夫

I. はじめに

1880年に発見されたシロアム碑文は、欠損部分の再構成や二、三の語義の解釈などの細かい議論を除けば、碑文テキスト問題は解決済みと考えられてきた。ところが1991年にDan Gillが地質学に基づく新しい考察を発表して以来、未解決の問題を含めて新たに議論が展開されるようになった¹⁾。

更に、ヒゼキヤ（シロアム）地下水道の建造に関しても、前701年のセンナケリブ襲来に備えて、ヒゼキヤ王(727-698 B.C.E.)が「彼が貯水池と水路とを造り、町へ水を引き入れた」（王下20章20節）ものという言わば共通の歴史認識に対しても疑義が提出されるに至った²⁾。

このような学界の新しい動向を踏まえて、本稿では、シロアム碑文の未解決の問題の解明を試み、更にヒゼキヤ地下水道に関する技術的諸問題、ヒゼキヤ王との時代史的関連についての議論を深めることとしたい。

II. 古代エルサレムの水利システムと問題の所在

ダビデの町の東斜面のキドロンの谷の底近くにあるギホンの泉は間歇泉で、「ギホン」gîhônの名は「噴出する」（ヘブライ語語根gyh/gwh）に由来する。このギホンの泉が古代エルサレムにおける唯一とも言うべき水源で³⁾、これに関連する三つの水利システムが存在する。古い順に発見者の名に因んだ「ウォレンの竪穴」（遅くとも前11世紀に建造、1867年発見）⁴⁾、シロアム灌漑水路（前10世紀のソロモン時代に建造）、ヒゼキヤ地下水道（1838年発見）である。最後のヒゼキヤ地下水道は、アッシリアのセンナケリブ襲来（前701年）に備えてヒゼキヤ王が建造したとされている（王下20章20節、代下32章3~4、30節、シラ書48章17節）⁵⁾。この地下水道に関しては、代下

32章30節前半には「このヒゼキヤはギホンの水の上の方の出口を塞ぎ、ダビデの町の西側に向かって真直ぐに流れ下るようにした。」(私訳)と記録されている。これは現在もシロアムの池へ流れ込んでいる地下水道と同定されている。この地下水道は長さ約532メートルで北と南で大きく湾曲していて、S字型のカーブを描いている。この長さは後述するシロアム碑文の「1200 アンマ」(5行目)にはほぼ等しい。因に、ギホンの泉とシロアムの池の直線距離は320メートルである。羅針盤のない時代にシロアム地下水道が何故真直ぐではなく蛇行して掘られているのか。その理由をめぐっていくつかの推論がなされている。Clermont-Ganneauは、南の湾曲部に関しては、ダビデ王家の墓のような聖地を避けるために迂回したのであり、北の湾曲部に関しては、市中のある井戸を通るためであったと考えた⁶⁾。しかしこの説明は十分な根拠がない。シロアム碑文に拠れば、この地下水道は両方向から掘削が進められ、中間地点で出会ったと記されているが、もし全く新たに地下水道を掘り進んで行くとすれば、地下で蛇行している方向づけをどのように行ったのか。またオイルランプを使用している掘削作業員にとって換気が絶対に必要だが、それらはどのようになされたのか。これら二点の技術上の困難さを如何に克服したかが説明されねばならない。直進せず湾曲している理由については、軟岩を辿ったため⁷⁾、或いは、中間の硬さの岩盤(meleke)を辿ったためという説明もなされているが、これも十分な根拠が得られていない。地上の先導者の音に従って掘削作業を行うために東の斜面を南北から掘り進めたという考えは⁸⁾、それでも合流地点近くでは、掘り間違えて何回か軌道修正をしており、試行錯誤を繰り返している事実を十分に説明出来ない。自然の亀裂を辿って掘削が行われたという学説を最初に提出したのはH. Sulleyである。この説はその後、水が漏出している岩の割れ目を辿った、或いは、カルスト地域ではよく見られる小さな地下水流ないし通気孔を辿って拡張したのだ、という学説へと発展する。最後の提案はトンネルが湾曲していることや掘削作業の際の換気用の空気の供給の問題を十分説明できる⁹⁾。

このような学界の動向の中で先に触れた Dan Gill が地質学に基づく研究を

踏まえてこの問題に取り組んだ。彼は先ず、これまで提出された諸学説の問題点を検討した後、三つの水利システムの地質学的考察を展開する。そこで得られた結果から、シロアム地下水道は、カルストが自然融解して出来た空洞や堅穴を拡張し、機能的な水利システムに統合したものであるという結論に至る。地質学的根拠に基づいて Sulley 説を補強したと言えよう。自然に出来ていた空洞の勾配は北低南高であったが、ヒゼキヤ時代の掘削工事はこの勾配を逆転し、ギホンの泉から流れ下るように変更された。シロアム水路はギホンの泉より 2.38 m 高い位置にあるので、最初はウォレンの堅穴の側にダムを造り、水位を揚げてシロアム水路に水を導いたが、シロアム地下水道が完成後に、ダムを除去して水流を逆流させたのだと彼は説明する。

Gill は地質学的考察に続いて彼の聖書理解をも提示している¹⁰⁾。先ず代下 32 章 30 節を「そして彼ヒゼキヤはギホンの水の上の方の出口をせき止め、ダビデの町の西側に向かって真直ぐに流れ下るようにした。」と読む。ヘブライ語は「上の方にあるギホン」とも読めるが、この地区に「下の方にあるギホン」と二つあるわけではないのでこの解釈は採用できない¹¹⁾。「真直ぐに流れ下る」と訳した語は動词语根 *yāšar* の強意形で、「正確な傾斜に沿って」という技術専門用語だと彼は指摘する。代下 32 章 4 節に記述されている「全ての水源とその地に溢れ出ている流れを塞ぎ止めた」（私訳）という事態は、30 節との関連で理解でき、ギホンの泉からシロアム水路への入口とキドロンの谷の川床への出口が堰止められたことを指すと Gill は解釈する。次に、サム下 5 章 7～8 節、代上 11 章 5～6 節にあるダビデのエルサレム攻略の出来事の記録が考察されている。これまで *sinnôr* (サム下 5 章 8 節) の語義をめぐる言語学的議論が戦わされてきたが、Gill は事実として、この時代にエルサレム東側の城壁外部から侵入可能な地点は、「ギホンの洞窟」かウォレンの堅穴の上部のトンネルの二つしか無かったことを指摘する。従って *sinnôr* はそれらのどちらかに限定されるが、現在あるウォレンの堅穴は当時は存在せず、ヨアブが登ったとされる可能性のある場所の候補からは排除されることになる。

III. ヒゼキヤ時代史概観

ここで上述の地下水道の建造者と目されているヒゼキヤ王の時代を概観しておこう。前722年に北王国の首都サマリアがアッシリアの攻撃により陥落し¹²⁾、緩衝地帯の消滅により、南王国ユダはアッシリア帝国の軍事的脅威に直接対峙しなければならなくなった。又、捕囚を免れた多くのイスラエル人が南のユダ王国へ流入し、人口動態が急激に変動したと推定されている。殊にエルサレムでは、急激に人口が増加したことに伴い、飲料水を確保するために各自の家では、雨水を溜める貯水槽が使われていた。この他に、洗濯用、家畜用、灌漑用の水を確保するために溜め池や貯水池が利用された¹³⁾。そのような状況の中で即位したヒゼキヤ王の治世年に関しては、大きく分けて二種類の年代が提案されている。サマリアの陥落（前722年）から6年遡る（王下18章10節）ことを基本にし、治世年数29年（王下18章2節）を考慮すると、前727～698年となる¹⁴⁾。これとは別に、アハズ王の死んだ年とティグラトピレセル三世の死んだ年が重なるとすれば（イザ14章28～29節）、バビロニア年代記から前727年ないし726年がヒゼキヤの即位年となり、先の結果と重なる。もう一つの提案は、センナケリブの侵攻の年（前701年）を「ヒゼキヤ王の治世第14年」（王下18章13節 // イザ36章1節）と同定するもので、これに従うならば、彼の治世年は前716/5～687/6年となる¹⁵⁾。後者の年代によるとサマリア陥落時にヒゼキヤが即位していないことになる（王下18章1, 9～10節に矛盾）。どちらを採用するかによって、前701年のセンナケリブのパレスチナ侵攻がヒゼキヤ治世の末期になるか、或いは彼の治世の半ばになり、彼はその後15年間王位に即いていたことになる（王下20章6節）かの選択となる。

ヒゼキヤの反アッシリア運動（王下18章7節）がいつ開始されたかについては、主に二通りの主張が存在する。一つはサルゴン二世の死（前705年）後、センナケリブの即位後の混乱を見て間もなく始められたとするものである¹⁶⁾。これに対してもう少し早い時期を想定し、前712年のアッシリアの最後の西方遠征と前705年のサルゴンの死の間と考える可能性も否定しきれ

ない¹⁷⁾。具体的な防衛作業の中には、水利システムの整備とダビデの町の防衛体制の強化（代下 32 章 3～5, 30 節, 王下 20 章 20 節, イザ 22 章 9～10 節をも参照）や補給基地の建設（代下 32 章 28 節）である。歴代誌の記述では、ヒゼキヤの宗教改革に力点が置かれて、詳細な記述がなされている（代下 29 章 3 節～31 章 21 節, 王下 18 章 3～6, 22 節をも参照）。この宗教改革運動が彼の反アッシリア活動の一環で、アッシリアの宗教の影響を取り除いて、エルサレムの聖所へ国民を結び付けて結束させるためのものとの見方もあるが¹⁸⁾、宗教改革により国民の間に亀裂が生じる恐れがあるのだから、戦争をも覚悟した直後の反アッシリア活動の一環ではなく、前 705 年より前に始まったと考える方が妥当であろう¹⁹⁾。代下 29 章 3 節は「その治世の第一年の第一の月」とするが、これは歴代誌史家の神学的表現であり、史実として文字通りには受け取れない。しかしサマリア陥落後のいつかと考えて誤りないだろう。

センナケリブの襲来に関しては、聖書には三つの記述が存在する（王下 18 章 13 節～19 章 37 節, イザ 36 章 1 節～37 章 38 節, 代下 32 章 1～23 節）が、これが前 701 年の彼の第三次遠征であることはアッシリア資料から明らかである²⁰⁾。「クシュの王ティルハカ」（王下 19 章 9 節）への言及から、センナケリブの第二回襲来を想定する学説がある。何故ならティルハカの即位はエジプト資料に拠れば前 690 年だからである。この困難な問題については、アッシリア資料, エジプト資料, 聖書の記述を詳細に検討しなければならないが、ここでは前 701 年の一回の侵攻だけを想定しておく²¹⁾。

IV. シロアム碑文の再検討

Dan Gill の地質学に基づく研究は、シロアム碑文のテキストの解釈にも新たな視点を投じることになった。以下では関連する箇所重点を置いてテキストの再考察を行う。シロアム碑文は 1880 年に発見され、1890 年以来イスタンブールの [帝国] 考古学博物館に移されて、所蔵されている。碑文の大きさは高さ約 50 センチメートル, 幅 66 センチメートルで、元来はトンネルの

南端から約6メートル内側の東壁に、用意された表面の下半分に碑文が彫られていた。上半分にはレリーフが予定されていたのか、それとも、下書きされたテキストを最後から彫り進めていって途中で放棄されてしまったのか、どちらかと推測される。テキストはいくつかの欠損部分を含む。以下判読されているテキストと推読された部分を提示し、私訳を付す。その後に欠損部分の再構成の問題と語義の解釈を論じることとする。

1. [tmt.] hnqbh. wzh. hyh. dbr. hnqbh. b'wd [.hḥṣbm. mnpm. 't.]
2. hgrzn. 'š. 'l. r'w. wb'wd. šš. 'mt. lhn [qb. nšm]'. ql. 'š. q
3. r'. 'l. r'w. ky. hyt. zdh. bsr. mymn [.] w[mślm'] l. wbym. h
4. nqbh. hk. hḥṣbm. 'š. lqrt. r'w. grzn. 'l. [g] rzn. wylkw [.]
5. hmym. mn. hmws'. 'l. hbrkh. bm'ty [m. w]'lp. 'mh. wm [']
6. t. 'mh. hyh. gbh. hsr. 'l. r'š. hḥṣb [m].

私訳

¹掘削が遂に完了した。そしてこれがその掘削の経緯である。[掘削作業員らが、] ²一方の一団が他方の同朋に向かって鑿¹[を振るっている] 時に、²更に未だ3アンマも掘削[されなければならない] 時に、一方の一団が³他方の同朋に向かって叫んで²いる声が[聞えた。]³というのは、南から[北へ]走っている岩に亀裂があったからである。そこで⁴その(最後の)掘削が為される³日に、⁴掘削作業員らは、一方の一団が他方の同朋に向かって、鑿に向かって鑿で、穿ち進んだ。そして遂に⁵水が1200アンマの距離を水源から池へ⁴流れた。⁵そして⁶掘削作業員らの頭上の岩の高さは⁵100⁶アンマであった。

欠損部分の再構成

[tmt] (1行目冒頭) は Gibson による再構成。語根 tmm の完了・3人称・女性・単数で、tmh ないし tmmh の代りに語末の古形 t がこの時代には保

持されていたと想定されている。名詞形 tm も考えられるが、聖書では倫理的意味でしか使われていない。Gibson は別の再構成の可能性として z't, hnh, hn を示唆している。z't の支持者は多い²³⁾。その外に dbr も提案されている²⁴⁾。Sasson は二文字分の余地しかないことと、3-4 行目との並行から ym を補い、トンネルの開通した日と理解する。聖書にも特別な日への言及が多数あることも指摘されている²⁵⁾。これは Shea によって支持されている。Shea は完成の日と関連させ、hnqbh をトンネル全体を指すのではなく、両方向から掘り進んできて、最後に残された部分に穴を穿つことを指すと限定する²⁶⁾。このようにいくつかの再構成が可能だが、ここでは「掘削が遂に完了した」という感嘆を込めた動詞文を支持しておく。

[. hhšbm. mnpm.] (1 行目末) の欠損部分の再構成に関しては、多くの研究者間にここまでは意見の一致が見られるが、この後に [t.] を補うかどうかで見解が分かれている²⁷⁾。行末の taw の痕跡らしきものを taw と認知するかどうか、文法的には冠詞付きの目的語が続くので目的語明示の小辞を入れる方がよいかどうかで判断が分かれる。ここでは [t.] を補う立場を支持している。しかしたとえこの小辞を補っても 1 行目は最後の行を除いた他の行よりも短いことに変わりはない。

lhn [qb. nšm]' (2 行目) のうち、前半の再構成に関しては、qôp が読めるか否かは別にして、意見の相違はない。後半の動詞が語根 šm' から来ている

うな表現を、出 14:29; サム下 16:6; 王上 22:19 に求めることができる²⁹⁾。

語義の解釈

nqbh について (1 行目 [2 回], 4 行目, 2 行目に動詞 [部分的に再構成])
わずか 6 行の碑文に部分的再構成も含めて 4 回も出てくる鍵語。1 行目に関しては既述の通り、名詞 (女性単数) と理解した。2 行目の再構成に関しては、ここではニファル形不定詞 *l'hinnāqēb* としたが必ずしも動詞に限定されない。例えば前掲の Shea は、名詞形を想定する。Shea はここを「[最後に残された部分に] 穴を穿つ [こと] まで 3 アンマになった時」と理解する³⁰⁾。3~4 行目の hnqbh に関しては、1 行目の 2 例と同様に名詞と取ることも可能だが、創 21:8 やレビ 6:13 の用例からニファル形不定詞プラス人称接尾辞と取ることも可能である³¹⁾。聖書では語根 nqb は動詞でも名詞 nqbh でも頻繁に使用されるが、どれも地下水道の意味では使われていない (王下 12 章 10 節, 18 章 21 節, イザ 36 章 6 節, ハバ 3 章 14 節, ハガ 1 章 6 節, ヨブ 40 章 24, 26 節)。派生語の maqqebet (イザ 51 章 1 節) が最も近い用例と言えるかも知れない。Sasson はアラビア語と原シナイ碑文の用例から「トンネル」の意味を支持し得ると考えるが³²⁾, Shea の限定された意味を支持したい。聖書でヒゼキヤの地下水道に言及していると考えられている箇所では、むしろ *t'ālāh* が使用されている。

「彼が貯水池 (*b'rēkâh*) と水路 (*t'ālāh*) とを造り、町へ水を引き入れたこと」

(王下 20 章 20 節)

しかしこの語は、ヒゼキヤ以前から存在した水路をも指すので、必ずしも「暗渠, トンネル」には限定出来ない (イザ 7 章 3 節, 36 章 2 節, 王下 18 章 17 節に出てくる *te'ālat habb'rēkâh hā'elyônâh* 「上の池の水路」を参照)。又、「溝」の意味では王下 18 章 32, 35, 38 節に、「水路」の意味では、ヨブ 38 章 25 節, エゼ 31 章 4 節に出てくるが、いずれも暗渠ではない。しかし、上記の王下 20 章 20 節の用例は、代下 32 章 3~4, 30 節の記述と関連させ

た時、ヒゼキヤの地下水道を指示する可能性が生じてくると言えよう。

h_{sb} について (1 行目 [再構成], 4 行目, 6 行目)

聖書でもこれの分詞形が「石工」として使われている例は、イザ 10 章 15 節の外に王上 5 章 29 節, 王下 12 章 13 節など多数ある。申 6 章 11 節, エレ 2 章 13 節, ネヘ 9 章 25 節, 代下 26 章 10 節は, 水道工事に直接関係する用例である。

mnpm について (1 行目 [再構成])

語根 nwp のヒフィル形分詞 3 人称男性複数で, 道具を動かして作業を進める様子を表現し, 出 20 章 25 節, 申 27 章 5 節, ヨシュ 8 章 31 節, イザ 10 章 15 節などの用例からこの再構成は十分な根拠があると言えよう。

grzn について (2 行目, 4 行目 [2 回, 2 回目は部分的に再構成])

聖書では, 4 回使用されている語だが, 殊にイザ 10 章 15 節では, われわれの 1 行目 (再構成) と 4 行目と同様に動詞語根 h_{sb} と同時に出てくる。地下での掘削の様子を鮮明に描写している語である。

zdh (3 行目) について

ヒゼキヤ地下水道は自然に出来た裂け目を利用したのだという学説は, 前述のように Henry Sulley に遡る。この推論は現在多くの研究者によって支持されている³³⁾。この立場は 3 行目の zdh の語義を語根 znd からの派生語として説明する。しかしこの語根はヘブライ語にはなく, 辛うじてシリヤ語, アラビア語に見い出されるのみである。しかも「裂け目」という意味に至るまでが間接的である。従って, 状況には合致するが, 言語学的根拠が弱いと言えよう。そこでもう一つの学説が提出されることになった。例えば Coote は, 語根 zyd から理解する。Puech の解釈もこれに連なる³⁴⁾。ここでは Shea の説明を聴こう³⁵⁾。語根 zyd は創 25 章 29 節に「煮炊きをする」と

いう意味で出て来る。ここから、人間が感情的に激することを指す例が派生する（出 21 章 14 節）。更に、他人を横柄に、攻撃的に扱う例へと展開する（申 1 章 43 節，17 章 13 節，18 章 20 節）。シロアム碑文の文脈では、掘削作業員たちが完成を間近に、感情が高ぶって精神的に興奮した状態が想定される。これらに加えて、Younger は、Müller 説として **dwd* (>*zûdā*)（「揺り動かす，興奮する」）を紹介している。しかし、Younger 自身は、最終的には Gill の理解を受容している³⁶⁾。

さて、既述のように Gill は両側からの掘削作業は、カルストが自然融解して出来た空洞を利用したのであり、だからギホンの泉からたとえ蛇行していてもシロアムの池に至ることが可能であったし、オイルランプを使用しての作業も換気の心配をせずに可能であったと主張している。又、両側からの掘削作業が中間地点で出会えたのもまさに既存の空洞のせいには帰している³⁷⁾。自然の割れ目の利用説の傍証として天井の高さが一様ではないことも挙げられている³⁸⁾。Gill は南高北低の勾配を後から北高南低の勾配に変えて、水がシロアムの池に流れるように変更したと考える。水流方向の変更は、王下 20 章 20 節，代下 32 章 3～4，30 節，シラ書 48 章 17 節の記述の解釈にも依存している。従って Gill は当然のことながら *zdh* について N. H. Snaith の「裂け目」という理解を採用する³⁹⁾。又、del Olmo Lete は文脈の類似からウガリト語の *dd* と *zdh* を関連させている⁴⁰⁾。del Olmo Lete 説が、「裂け目」説の言語学的弱さをどこまで補い得るかは、今後の議論に委ねられている。

mws' (5 行目) について

語根 *ys'* からの派生語 *môšā'* で、「出て来る場所」から「水源，泉」の意味をも包含する。この文脈ではギホンの泉そのもの、ないし先に引用した代下 32 章 30 節（「このヒゼキヤはギホンの水の上の方の出口をせき止め，ダビデの町の西側に向かって真直ぐに流れ下るようにした。」）に見られるように、もう少し限定された流出口という意味で使われている可能性もある。この碑文の用例に関して Gill は後者、すなわち、湧き出た水の流出口を指し、

東への出口を具体的に考えている⁴¹⁾。泉そのものを堰止めることは不可能であるから、当然であろう。水源とその流出口の両者を截然と区別は出来ないが、聖書では外に、「彼はその水源に出て行って」'el mōšā' hammaim (王下 2 章 21 節)、「そして君は水の豊富な園のように、水の枯渇しない水源のようになる。」ūk^emōšā' maim (イザ 58 章 11 節) (その他、詩 107 篇 33, 35 節, イザ 41 章 18 節) にその用例を見出すことが出来る。

5 行目 brkh について

ヒゼキヤが「水路」 t^eālāh とともに「貯水池」 b^erēkāh を造ったことは先に引用した王下 20 章 20 節に明言されており、シロアム碑文の brkh と同定出来るかどうかは考慮に値しよう。勿論、エルサレムにはいくつかの灌漑用の池があり、それらの同定の難しさについては既述の通りである。例えば、「布晒し人の野の公道に沿う上の貯水池の水路」 t^eālat habb^erēkāh hā'elyōnāh (王下 18 章 17 節, イザ 36 章 2 節, イザ 7 章 3 節も参照) ですから、その同定が困難とされている⁴²⁾。しかしながらこれら三例はいずれも「上の貯水池の水路」への言及であり、その内の最初の二例はヒゼキヤ時代の出来事を背景としている。先に引用した列王記下 20 章 20 節の表現「彼が貯水池と水路とを造り、町へ水を引き入れたこと」を勘案すると、これが状況としてはシロアムの池と同定できよう。もっともシリア・エフライム戦争を背景とするイザ 7 章 3 節に言及されているアハズ王の時代に既にこれが存在したとすれば、この同定は成り立たないことになる。

この語に関しては捕囚後の時代状況を反映している用例を見ておこう。

「彼はそれを建設し、その屋根を葺き、その扉、その掛け金、及びその横木を設置し、王の庭園へと通じるシェラの池 [別訳「灌漑用貯水池」] b^erēkat haššelah の囲壁をダビデの町から下ってくる階段まで修復した。」(ネヘ 3 章 15 節)

「彼に続いて、ベト・ツルの半地区の長アズブクの子ネヘミヤが、ダビデの墓の向かい側までと、人工の池 habb^erēkāh hā'āsūyāh まで、更

に勇者の兵営までを補強した。」(ネヘ3章16節)

15節の「シェラの池」とイザ8章6節の「シロアの水」とは、シェラもシロアも同じ語根からなり、同じ池を指している、「王の庭園」にあることを勘案するとネヘ2章14節の「王の池」と同定出来るかも知れない。16節の「人工の池」は近くの別の池で、キドロンの谷に沿った灌漑水路沿いに作られたものであろう。

これらに加えて、前2世紀始めに書かれたとされるベン・シラの知恵も見ておこう。

「ヒゼキヤは彼の都の要塞を固め、市内へ水を引き、鉄製の工具で鋭い岩山を穿ち、用水池をつくった。」⁴³⁾(「ベン・シラの知恵」48章17節、新共同訳シラ書も参照。)ここには、代下32章2～5節、王下20章20節の要素と同時に、シロアム碑文で描写されている掘削の様子を窺わせる内容を読み取ることができよう。既述の列王記にしても歴代誌にしても、ヒゼキヤの地下水道工事に関する限り、間接的、かつ部分的記述であるのに対して、このベン・シラの記述に至って初めて、シロアム碑文の記述内容と結び付けられる直接的で具体的な工事への言及となっていると見ることができよう。

最後にこの碑文の性格について考察する。先にも言及したようにこの碑文が書かれているその上の部分は空白のまま残されている。そこに現存の碑文の前半部分が書かれるように意図されていたかという疑問が残されている以上、断定的なことは言えないが、現存する碑文から判断する限りでは、この碑文自体は王による建立ではなく、掘削作業に直接携わった技術者が自分たちの業績を記録するために、恐らく王に無断で書き記したという類の碑文だと推測される。従って王朝碑文とは異なり一人称は現われず、内容も技術的な事柄がその記述の中心になっているのである⁴⁴⁾。

以上の議論から、シロアム碑文が聖書の言語と密接な並行関係を保ち、ヒゼキヤ王の水道工事に関連する断片的な情報を補い、それらを連結する機能

を担い得る第一級の資料であることが再確認された。

V. Rogerson と Davies 説への応答

シロアムの池に注ぐから「シロアムのトンネル」と呼ぶことには取り立てて異議を唱える必然性はないが、ヒゼキヤ王が建設したから「ヒゼキヤのトンネル」と呼ぶという場合には、歴史的な検証が必要になる。殊に今まで見てきたように、聖書の言及は必ずしも明確にこのトンネル工事をヒゼキヤ王に帰していない。むしろ断片的に散在する聖書の記述と、アッシリア帝国からの聖書外の歴史資料、それにシロアム碑文を組み合わせると、その蓋然性が高いことが主張されるのみである。このような状況の中で、既述の如く Rogerson と Davies が共同執筆論文の中で異議を唱えた⁴⁵⁾。これはこれまでの議論とは反対方向からの問題への否定的接近であるから、一応の検討を加えて置きたい。彼らは三つの視点から再検討を迫る。一つはシロアム水利システムとエルサレムの城壁の位置の問題、二つ目はギホンの泉に関連する聖書の記述の問題、三つ目はシロアム碑文の主として書体の検討である。一つ目の考察から彼らはトンネルの建造をハスモニア時代(前152～37年)に想定する。二つ目に関してはわれわれが検討した聖書の箇所を再検討した後、トンネル工事とヒゼキヤの事績とは無関係であり、彼が工事に携わったのはウォレンの竪穴であると結論づける。三つ目の検討はシロアム碑文の書体と綴り字の比較検討に関するものであり、結論としてはハスモニア時代に想定している。

これに対しては各方面から激しい反論が寄せられた。古代イスラエル史への基本的立場の違いも手伝って、「気違いじみた」論拠への反論の域を越えて、むしろ侮蔑に近い表現が多々見られると言っても過言ではない⁴⁶⁾。個々の議論に立ち入る紙幅は残されていないが、Rogerson と Davies の議論が、聖書の記述に対して余りに懐疑的であり、資料的裏づけのないものはまるで存在しないかのごとく否定的に扱う余り、極端な結論に至っていることは否めないだろう。また、シロアム碑文の書体と表記法の検討に関しても、書体

の検討から歴史的年代決定は出来ないという碑文学上の常識を表明しつつ、論拠薄弱のまま、結論として「考古学的、歴史的根拠に基いて」ハスモニア時代に位置づける、という議論の展開は必ずしも説得的ではない。又、Dan Gill が地質学的根拠に基いて、ギホンの泉に関連する三つの水利システムを考察し、ウォレンの竪穴について下した相対的年代をも全く無視して、これをヒゼキヤの工事に帰することも、やはり学問的手続きを欠いた議論として退けられても仕方がないであろう。

VI. 終りに

以上 Dan Gill による地質学的考察を通して新たに始められた議論の展開を追いながら、ヒゼキヤ（シロアム）地下水道の建造に関する歴史的諸問題、シロアム碑文そのものの分析とエルサレムの水利システムに関連するいくつかの聖書の箇所再考察、又、学界の主流に対する Rogerson と Davies の批判への応答を試みてきた。どの問題も程度の差はあれ、様々な情報を総合化した時にそれなりに蓋然性は認められるが、ある意味で決定的なものを欠いている。例えば、ヒゼキヤの治世年代、彼の宗教改革と反アッシリア運動との関連、センナケリブの襲来の回数問題のどれをとっても、聖書内で、又それらと聖書外資料とが矛盾を内包していることは既に指摘した通りである。同じことがシロアム碑文そのものと聖書の記述との関係に関しても言える。前者が現在残存する碑文に関する限り、ヒゼキヤ（シロアム）地下水道の掘削を命じたとされるヒゼキヤ王には一切言及せず（王下 20 章 20 節参照）、専ら技術者の視点と関心から書かれたのに対し、聖書の記述は公式の王朝の記録の解釈に基いており、両者が触れ合う部分が極めて僅かであり、触れ合わない部分に関しては研究者の解釈に委ねられていると言っても過言ではない。Dan Gill による地質学的考察に関しても、地質学の性格上、ダビデの町の地下の地層の分類は結局は科学的仮説であり、地層間に空洞が出来る可能性は指摘できても、事実としてギホンの泉とシロアムの池とを繋ぐ空洞が存在したかどうかは、歴史的事実とは断定できず、やはり蓋然性の問題に

帰してしまう。このように否定的な側面はいくらでも指摘できよう。それにも拘わらず、Dan Gill が提起した学説は、地下の見えない側面に地質学に基づく科学的考察を導入し、聖書学者や歴史学者の推測以上の視点を提供したし、その視点から聖書を含めた現存する歴史的諸資料との関連をも再考察することにより、従来断片的に言われてきた事柄を総合化し、その蓋然性をより確実なものに近づけたと考えられる。その意味で彼の学説は学界に大きな貢献をなしたと言えよう。拙稿で未解決の問題の所在を指摘し、それらを可能な限り鮮明にしたことは、残された諸問題の再検討、解決への手掛かりとなるであろうことを期待したい。

註

- 1) Dan Gill, "Subterranean Waterworks of Biblical Jerusalem: Adaptation of a Karst System," *Science* 254 (1991), pp. 1467-71. 同, "How They Met: Geology Solves Long-Standing Mystery of Hezekiah's Tunnelers," *BAR* 20,4 (1994), pp. 20-33, 64. Stig Norin, "The Age of the Siloam Inscription and Hezekiah's Tunnel," *VT* 48,1 (1998), pp. 37-48. Simon B. Parker, "The Story of the Siloam Tunnel," in his *Stories in Scripture and Inscriptions: Comparative Studies on Narratives in Northwest Semitic Inscriptions and the Hebrew Bible* (Oxford University Press, New York, 1997), pp. 36-42. 同, "Siloam Inscription Memorializes Engineering Achievement," *BAR* 20,4 (1994), pp. 36-38. K. L. Younger, "The Siloam Tunnel Inscription: An Integrated Reading," *UF* 26 (1994), pp. 543-556. Manfred Görg, "Sinnör-ein Versuch zur Wortdeutung," *BN* 76 (1995), pp. 7-13.
- 2) John Rogerson and Philip R. Davies, "Was the Siloam Tunnel Built by Hezekiah?" *BA* 59,3 (1996), pp. 138-149. これに対する反論については Ronald S. Hendel, "The Date of the Siloam Inscription: A Rejoinder to Rogerson and Davies," *BA* 59,4 (1996), pp. 233-237. Jo Ann Hackett et al., "Defusing Pseudo-Scholarship: The Siloam Inscription Ain't Hasmonean," *BAR* 23,2 (1997), pp. 41-50, 68.
- 3) ダビデの町の南にエン・ロゲルという泉ないし井戸があるが水量が少ない(ヨシュ 15 章 7~8 節参照)。ギホンの泉は一日に一人 20 リットルの水を一万人に供給出来たと言われている。その他には、「エタム」システムの一環で伝承上「ソロモンの池」と呼ばれる貯水池がエルサレムの南にあり、これはエルサレムの南 11.5 km にある泉から水を引いてきたものである。王国時代に遡る可能性はあるが、建造者がソロモンかどうかは確定出来ない。J. Wilkinson, "Ancient Jerusalem: Its Water Supply and Population," *PEQ* 106 (1974), pp. 33, 36f. を参照。
- 4) まとまった記述としては今でも Y. Shiloh, "Jerusalem's Water Supply During

Siege: The Rediscovery of Warren's Shaft," *BAR* 7,4 (1981), pp. 24-39 が際立っている。

- 5) 建造年代の推定は前掲 Gill, (1994), p. 23 に拠る。シロアムの灌漑水路とヒゼキヤの地下水道に関連する池は複数存在した。R. Wenning and E. Zenger, "Die verschiedenen Systeme der Wassernutzung im südlichen Jerusalem und die Bezugnahme darauf in biblischen Texten," *UF* 14 (1982), pp. 279-294 を参照。ヒゼキヤの地下水道の建造年代やシロアム碑文の内容理解に関して前掲 Rogerson and Davies から提出された疑義に対しては後述する。
- 6) "Les tombeaux de David et des rois de Juda et le tunnel-aqueduc de Siloé" *Recueil d'Archéologie Orientale* 2 (1898), pp. 254-294.
- 7) C. R. Conder, "The Siloam Tunnel," *PEFQS* (1882), pp. 122-131.
- 8) N. Shaheen, "The Sinous Shape of Hezekiah's Tunnel," *PEQ* 111 (1979), pp. 103-108. この Shaheen 説に対して前掲 K. L. Younger, Jr. ("The Siloam Tunnel Inscription," pp. 547f.) は、証明されていないし、証明され得ない前提に基くとって批判している。
- 9) Sulley 説を含めてここでの議論については、前掲 Gill (1991), p. 1468, 同 (1994), p. 31 を参照。前掲 K. L. Younger, Jr. ("The Siloam Tunnel Inscription," p. 548) もこれを支持する。
- 10) 前掲論文 (1991), p. 1470.
- 11) そのように解釈した研究者として Gill は、H. Vincent, R. Amiran, G. A. Smith の名前を注の中で挙げている。新共同訳の「上の方にあるギホンの湧き水をせき止め、」という翻訳は、「上の方にあるギホン」ないし「上の方にある湧き水」の両方の意味に取れるが、前者はもとより後者も「二つの湧き水」を予想させる。この訳の問題点は「上の方にある」が修飾する *môsa'* 「出口」がきちんと訳出されていないことにある。ちなみに英訳では、"the upper water-course" (KJV), "the upper outlet" (RSV, NRSV) に見られるように、七十人訳 ("ἡ ἔξοδος") 以来の伝統的訳語がきちんと継承されている。関根正雄訳『旧約聖書』(教文館, 1997年) もこの伝統を継承し、「ギホンの水の上の出口をふさぎ、ダビデの町の西の側に真すぐに流れ下らせたのは彼ヒゼキヤフであった。」と訳されている。IV 節「シロアム碑文の再検討」で、シロアム碑文の 5 行目の *môsa'* についての議論を参照。
- 12) 王下 17 章 5~6 節, 18 章 9~11 節。
- 13) 聖書にはいくつかの池への言及があるが、それらの正確な位置については論争がある。「上の池」(王下 18 章 17 節, イザ 7 章 3 節, 36 章 2 節) は現在のシロアムの池 (Birket es Silwân), 「下の池」(イザ 22 章 9 節) ないし「古い池」(イザ 22 章 11 節) は、現在「赤池」(Birket el Hamra) と呼ばれ、乾いている。「上の池」は「下の池」の北西 30 メートルの位置にある。「王の池」(ネヘ 2 章 14 節) については、「上の池」と「下の池」の両方の同定が提案されている。「シェラの池」(ネヘ 3 章 15 節) と「人工の池」(ネヘ 3 章 16 節) はどちらかが「王の池」と同定出来るかも知れない。これらの池や貯水池の機能や水利、人口動態に関する全般的な研究に関しては、前掲の Wilkinson, "Ancient Jerusalem: Its Water Supply and Population" 論文を参照。
- 14) H. Tadmor, "The Chronology of the First Temple Period: A Presentation and Evaluation of the Sources," in S. A. Soggin, *A History of Ancient Israel*

- (The Westminster Press, Philadelphia, 1984), pp. 368-411. これに基く議論として、W. H. Barnes, *Studies in the Chronology of the Divided Monarchy of Israel* (Scholars Press, Atlanta, 1991), pp. 154, 158 の結論部分を参照。最近の G. Galil, *The Chronology of the Kings of Israel and Judah* (E. J. Brill, Leiden, 1996), pp. 98-104 の議論と結論 (前 726-697/6 年) も大筋でこの立場と見ることができる。
- 15) E. R. Thiele, *The Mysterious Numbers of the Hebrew Kings* (Third re-revised ed., Zondervan, Grand Rapids, 1983).
 - 16) M. Cogan and H. Tadmor, *II Kings* (The Anchor Bible, Doubleday & Company, 1988), p. 222.
 - 17) Miller & Hayes, *A History of Ancient Israel and Judah* (The Westminster Press, Philadelphia, 1986), p. 354.
 - 18) M. Weinfeld, "Cult Centralization in Israel in the Light of a Neo-Babylonian Analogy" *JNES* 23 (1964), pp. 202-212.
 - 19) 前掲 Cogan and Tadmor, *II Kings*, p. 219.
 - 20) D. D. Luckenbill, *Ancient Records of Assyria and Babylonia*, Part 2 §§ 239-40 (Reprint ed., 1989, original ed., 1924), pp. 118-121 (*ANET*, pp. 287f.).
 - 21) 前掲 Cogan and Tadmor, *II Kings*, p. 249; W. H. Barnes, *Studies in the Chronology*, pp. 73ff.; Y. Aharoni, *The Land of the Bible: A Historical Geography* (Revised and Enlarged Edition, The Westminster Press, Philadelphia, 1979), pp. 387-394.
 - 22) 欠損部分をどのように再構成するかという問題が残されているが、判読が分かる箇所はほとんどない。J. C. L. Gibson, *TSSI*, 1, 1971, pp. 21-23 を基本としたが、この他にテキストと注解を含むものとしては、Donner-Rölig, *Kanaanäische und Aramäische Inschriften* (Otto Harrassowitz, Wiesbaden, 1971), no. 189 と Shmuel Ahituv, *Handbook of Ancient Hebrew Inscriptions* (Jerusalem, 1992, pp. 13-16) を挙げることができる。テキストの最近の刊行として G. I. Davies, *Ancient Hebrew Inscriptions: Corpus and Concordance* (Cambridge University Press, Cambridge, 1991; #4.116 'Siloam Tunnel Inscription,' p. 68) がある。これらを中心にテキストの再構成を試みる。
 - 23) 前掲 Donner-Rölig, G. I. Davies の外、David Diringer, *Le Inscriptione Antico-Ebraiche Palestinesi* (Firenze, 1934), p. 84; Sabatino Moscati, *L'epigrafia Ebraica Antica 1935-1950* (Roma, 1951), p. 40 を参照。この推読は列王記下 8 章 5 節の z't h'sh wzh bnh という構文に支持されるかも知れない。
 - 24) 前掲 Shmuel Ahituv.
 - 25) V. Sasson, "The Siloam Tunnel Inscription," *PEQ* 114 (1982), pp. 111-112. 但し、彼が引用した聖書のうち、創 21:8 と民 9:15 はいずれも ywm の後に不定詞が続いており、これに支持を求めらるべきであれば、後続の hnqbh もニフェル形不定詞の可能性のあることを指摘すべきだろう。
 - 26) W. H. Shea, "Commemorating the Final Breakthrough of the Siloam Tunnel," *FUCUS* 58 (Y. L. Arbeitman, ed., 1988), p. 432. この外に前掲 K. L. Younger, "The Siloam Tunnel Inscription," p. 551 も Sasson を支持する。
 - 27) 但し、hhsbm と mnpm の順序に関してどちらが先かは見解が分かれる。聖書の用例の傾向からこの順序をここでは採用した。小辞を補うのは、Donner-

- Rölig, Moscati, Diringer, Ahituv らである。
- 28) 前掲の諸研究者のうち、Gibson と Sasson だけが後者の立場である。われわれは完了形を採用した。
 - 29) この再構成は Ahituv による。Sasson は 7 文字ないし 8 文字のスペースを埋めるために代下 3:17 を論拠に冠詞を付加して [wmhśm]¹ と読む。
 - 30) 前掲 Shea, pp. 430, 433.
 - 31) 前掲 Ahituv, p. 16 の示唆に拠る。
 - 32) 前掲 Sasson, p. 114.
 - 33) 前掲 Gibson, p. 23; S. B. Parker, "Siloam Inscription," (1994), p. 37; Z. Abells and A. Arbit, "Some New Thoughts on Jerusalem's Ancient Water Systems," *PEQ* 127 (1995), p. 4.
 - 34) R. B. Coote, s. v. "Siloam Inscription" in *ABD* 6 (1992), p. 23; É Puech, "L'inscription du tunnel de Siló" *RB* 81 (1974), pp. 201f.
 - 35) 前掲 Shea, pp. 433f. Shea は H. Mischaud, "Un passage difficile dans l'inscription de Siloe," *VT* 8 (1958), pp. 297-302 に従っている。
 - 36) 前掲 Younger, pp. 549, 550.
 - 37) 前掲 Gill, 1991, p. 1469; 1994, p. 30.
 - 38) 天井の高さは 1.7~1.8 メートルの間であるが、シロアムの池への出口付近では最も高く 5 メートルを越える。Gill が南高北低と考える理由の一つは、この一番高い箇所天井が人工の手が加えられていない自然のままだという点にある。前掲 Gill, 1994, p. 32.
 - 39) 前掲 Gill, 1991, p. 1470. Snaithe の理解は、D. W. Thomas, Ed., *Documents from Old Testament Times* (Harper & Row, New York, 1958), pp. 209-211 に見ることが出来る。この理解は例えば前掲 (Ahituv, p. 16) の外にも多くの研究に見ることが出来る。
 - 40) G. Del Olmo Lete, "Notes on Ugaritic Semantics IV," *UF* 10 (1978), pp. 43f.
 - 41) 前掲 Gill, 1991, p. 1470.
 - 42) 前掲 Cogan and H. Tadmor, *II Kings*, p. 230 参照。
 - 43) 村岡崇光訳、『聖書外典偽典 2』(教文館, 1977 年), 199 頁。ベン・シラの知恵の年代については、上掲の村岡の概説 (71 頁) に拠っている。
 - 44) 前掲 Shea ("Commemorating the Final Breakthrough of the Siloam Tunnel," pp. 441f.) は、ヒゼキヤと同時代のセンナケリブが自国での水路完成を記念して残した碑文との対比を行っている。王の一人称での語り、神々の発案による工事の開始がセンナケリブの碑文の特徴なのに対し、シロアム碑文にはこれらの要素が全く欠如していることが指摘されている。この碑文の性格の問題に関しては前掲 Simon B. Parker, "The Story of the Siloam Tunnel," 同, "Siloam Inscription Memorializes Engineering Achievement" をも参照。
 - 45) 注 2 を参照。
 - 46) 注 2 の "Defusing Pseudo-Scholarship: The Siloam Inscription Ain't Hasmonian," *BAR* 23,2 (1997), pp. 41-50, 68 は、各々の分野の著名な専門家 Jo Ann Hackett, Frank Moore Cross, P. Kyle McCarter, Jr., Ada Yardeni, André Lemaire, Esther Eshel, Avi Hurvitz による共同執筆の反論集だが、事の重要性に鑑み、「徹底的、包括的に正体を暴露しよう」という穏やかならぬ意図の下に書かれたことが冒頭に宣言されている。